

「幌延問題」での高木さん

北海道の開拓農家に生まれ育った私が初めて高木仁三郎さんと接したのは、もう四半世紀ほど前の東京都内、三里塚闘争について党派に属さない人たちが話し合う場だった。成田開港が日程に上り、運転手をしながら地元農民を支援してきた東山薫さんが機動隊員のガス弾で殺される…といった緊迫の時代。川崎での公害反対の活動に取りくむ仲間と援農に行くなど、微力ながら私たちも三里塚とつながろうとしていた。

20人ほど集まったろうか、その会合を仕切っていたのが高木さんだった。すでに原子力や科学技術批判の論客と目され、名前はよく知っていた。まだ20代前半の若造の私には、まぶしい存在に映った。細かい中身は忘れてしまったが、凜とした表情、熱のこもった言葉で会議を進めていた姿が印象に残る。

つぎに会ったのは1981年、動燃(現核燃料サイクル開発機構)が私の郷里・下川町の鉦山でやっていた高レベル放射性廃棄物の地層処分にむけた実験のことで、原子力資料情報室を訪ねたときのように思う。実験結果をまとめた動燃の報告書について、助言を受けるためだ。「(岩塩層の処分場計画があった)ドイツのゴアレーベンのことを勉強してみないか」と勧められて資料をもらったり、来日中の高木さんの友人ヘルムート・ヒルシュ氏を紹介されて話を聞きに行ったりしたことも思い出す。

翌82年に帰郷してから、私は幌延町への放射性廃棄物施設の立地反対運動に関わるようになった。

汚れものも厭わない地元自治体の誘致運動に便乗した動燃は84年、「貯蔵工学センター」という名の核のゴミ捨て場計画を発表。過疎地の弱みにつけこんだ計画に抗し、まわりの町の酪農家や幅広い道民が反対運動に立ちあがり、北海道を大きく揺るがす問題へと発展していく(詳しくは拙著『核に揺れる北の大地』[七つ森書館]、『幌延』[技術と人間]を参照してほしい)。この運動は、高木さんという指南役の登場によって、理論的なよりどころを得たのである。

夏の短い北の町は、お盆のころには秋風が吹きはじめ、やがて紅葉が終わるとすぐに、雪の舞う季節がやってくる。高木さんが初めて幌延町を訪れたのは、計画発表からまもない84年の晩秋のことだった。

私たちは北海道北部の5市町で「高木仁三郎さんを囲む連続学習会」を企画し、議会での説明を含めて、5日間で合計11回、延べ900人ほどが講演に耳を傾けた。1日に3回も

話してもらおう無謀きわまりないスケジュールを組んだりしたが、高木さんは「人遣いが荒いなあ」と軽口を言いながら快く応じてくれた。当時、高木さんは46歳。動燃の計画をつぶすための情報を追い求めた、熱気あふれる時期ではあったものの、道産子たちの無理な要望が寿命を縮めさせてしまった一因かもしれない、と反省している。

放射能と人間、高レベル放射性廃棄物の性質、ガラス固化体とその貯蔵の問題点、「貯蔵工学センター」批判――高木さんは核科学者の立場から、この4項目について計画の疑問点を説いてまわった。



『市民科学者として生きる』（岩波新書）のなかで高木さんは、住民の前で話をするのが下手だった、と述懐している。「話が難しい」「まわりくどく理屈を説明したが、大学の授業のようだ」…と。このときの話も、住民たちにはやや難解なようだったが、

「幌延で計画を受け入れるならば、動燃で発生するすべての放射性廃棄物の一大集中地になるだろう」

などと事実をもとに的確な分析がなされたし、「道北の人たちは、幌延の至近距離にいて被害者だが、日本の原子力政策を支えることで太平洋住民などへの加害者にもなりうる。世界中の運動とも手をつなぎ、広がりをもってすみましょう」

という問題の核心に迫るメッセージは、聴衆

の心に重く響いたのではないだろうか。

このとき幌延町の建設候補地を訪れて地盤のようすを見学している写真(左上)が、同書の第8章に「全国各地をまわる」のキャプション付きで載っている(撮影者は私)。高木さんお気に入りの1枚だったのだろうか、大事に保存してくれたことがうれしかった。

「たとえば放射性廃棄物の処分の困難さを評して、『トイレのないマンション』という表現は、誰のつくり出したものか知らないが物事の本質について分かりやすい表現になっている。(略)しかしそう言う時、何故そうなのかという科学的、技術的背景は常に用意しておかなければならない。一つのことを言うために、私は性分から十いや百くらいのデータとか事実とかを用意する。(略)全国各地への旅行の日々が、そのまま、私にとっては『市民科学者』のための修行の日々だったと言えよう」(同書207ページ)

市民科学者として生きた人らしい一文だと思う。80年代の一時期、そうした旅行のひとつに同行できたことは、私にとって貴重な経験になった。

「幌延問題」での活躍ぶりは講演にとどまらなかった。計画が明るみになるや、当時の横路孝弘知事は「受け入れがたい」と表明。その知事の依頼を受けた高木さんは何度も札幌を訪れて、廃棄物問題の深刻さをレクチャーした、と聞く。のちに拒否姿勢がぐらつく横路知事だったが、高木さんの助言に沿って海外視察の訪問先を決めるなど、教えを乞うたわけだ。

その後の「幌延」は、立地断念の寸前まで追いつめたにもかかわらず、後継の堀達也知事が2000年10月、当初計画の中核施設だった深地層試験場のみの受け入れを表明した。核燃機構はこの夏、一部工事に着手し、数年後には軟弱な泥岩層に処分場とほぼ同じ直径の坑道を掘削する――という安全を軽視し、税金を浪費する計画を示している。この施設の周辺地域が将来、最終処分場にされる不安も消えていない。

高木さんが生きていたならば、未来にむけた火種を残した「幌延」のいまを、どう思うのだろうか。